

時之島の熊野宮とは（２）

熊澤 良嗣

熊野宮とは（１）で紹介した石碑には以下の文が刻まれている。

[表面]

古来熊野石ト稱へ里閭ノ尊崇スル處 口碑傳説文献遺蹟等ニ據リ 後龜山帝ノ皇曾孫(尊雅王王子)熊野宮信雅王永正拾壹年六月拾六日寶壽六拾壹歳ヲ以テ此地ニ薨去ヲ推定セラル熊野石ハ其瑩標タリ 隣接ノ八幡社復タ宮ノ靈祠トシテ祭祀ノ行事絶ユルナク連続今ニ及ヘリ 文明年間山名持豊 宮ヲ奉シ京師西陣ニ軍ヲ敷キ東軍ト対戦勝敗決セサルノ間病歿シ宮ハ奥州磐城国澤邑ノ僻陬ニ難ヲ避ケ 後年信州ニ又甲州ニ 明應年間更ニ尾州時之嶋ニ隱棲 自ラ民伍ニ下リ佛門ニ入り熊澤現覺ト名告ラレタリ 蓋シ熊澤家ノ始祖ニシテ系嗣現照元氏ヨリ遡ル貳拾代 大凡四百四拾年前ノ事ナリト傳ヘラル 今次建碑ノ企アルヤ予曾テ名古屋ニ第參師團長タルノ時 昭和拾八年秋親シク熊野石竝ニ八幡社ニ拝シ 瑩側ニ記念ノ榊ヲ手植シタルコトヲ想起シ感懷特ニ深キモノアリ 因リテ茲ニ事蹟ヲ稱述スト爾云フ

昭和參拾六年六月拾六日 賀陽恒憲撰 雲溪大宮森謹書

[裏面]

昭和卅六年十月五日建之 熊野宮信雅王顯彰会 十八代河内屋孫右 鐫

読みにくい旧漢字・カナの混交文であるから少し説明すると、この文は、名古屋の第3師団長だった賀陽宮恒憲王^{かやのみやつねのり}が熊野宮を訪れた時のことを回想して書いた形をとっているが「熊澤家ノ始祖ニシテ系嗣現照元氏」の部分など、建碑者である熊澤照元（後述）側が書いたのではないかと思われる表現が見られる。

碑文の概訳は次の通り。

「熊野石は、永正 11 年（1514）にこの地で亡くなった熊野宮信雅王（後亀山帝の曾孫で尊雅王の御子）の墓標である。信雅王の霊は南の八幡社で祀られてきた。信雅王は、応仁の乱があった文明年間（1470～80 年代）、山名持豊（宗全）に担がれ京都西陣にあった。宗全が病で没すると澤邑（福島県双葉郡辺）へ落ち延び、更に信州（長野県）甲州（山梨県）と逃れ、明応年間（1490 年代）に時之島にたどり着いて、僧名熊澤現覚を名乗って身を隠した。この人が熊澤氏の始祖であり、その 20 代目が照元氏である。

師団長だった私は昭和 18 年秋にこの地を訪れ、熊野宮に参拝して傍らに榊を植えた。
あの日を懐かしみながらこれを記す。 賀陽恒憲 昭和 36 年 6 月 16 日」

賀陽宮は皇族であったため、名古屋の第 43 師団がサイパン島へ派遣されることになったとき、斎藤中将与師団長を交代し、留守第 3 師団長となった。戦後昭和 22 年に皇籍を離れている。雲溪大宮は、尾西の書家で一宮市文化協会長を務めた大宮森次、河内屋は、本町通 8 丁目の地藏寺門前にある河内屋石材店である。

照元の母親は静江と言い、大然の弟与十三郎の孫である。静江の夫（熊澤靖元と改名）が会長となり「南朝熊澤史料調査会」を設立した。この静江家は東京墨田区で印刷業を営んでいた。照元を信雅王を始祖とする熊澤宗家 20 代当主と呼び、月刊紙「南朝及後南朝史料」を昭和 32～36 年にわたって刊行した。奇矯な言動で晩年世間の笑いものになった熊澤寛道の軽拳妄動を排撃し、南朝の正しい史実を究明することがその目的だったという。可能な調査はやり尽くしたとして昭和 36 年 5 月に 43 号で休刊、その秋に上記の石碑が建立された。建碑した信雅王顕彰会は、実質的に史料調査会と同一と考えられる。

なお、郷土史家の森徳一郎は以下のことを『郷土史 234 珍』に書いている。

(筆者の判断で一部省略、注を補足)

- ・熊澤寛道氏は後南朝学者を伴って、数回に渉り、私を啓蒙せんがため訪問せられた。
- ・米紙ライフの記者は、一宮市役所を訪い、その都度私は傳説地を案内した。
- ・熊澤照元氏は建碑のため、辞句の一部を(私に)質された。
- ・熊澤照元氏は昭和 36 年現地に碑を建てられた。
- ・史実に対しては、私は未だ研究の暇をもたないが、先ず第一に明応年間といえは南北朝合一より百年後のことである。この足利將軍全盛の時代に、家臣十家族を伴って突如この尾張平野の真ん中に来り住み、どうして人目に触れずにいたかという不審であるが、この地はもと鶺鴒ときの島と称して、木曾川八流の内でも特に本流なる日光川筋の南に添った川中島で、彼の天然記念物の鶺鴒が群れ住んだ全くの僻陬の小島で、落人の来り住むには極めて適當の地であった。

然らば誰が招いたか、導いたか、受け入れたかという、すぐ眼につくのは今熊澤一族の旦那寺なる飛保の曼陀羅寺である。同寺は開山が南朝、二世が北朝出身であり、以来歴代北朝系により法灯を継がれたが、南朝系開山のことは常に粗略にせず、開山上人の墓塔を無銘にて建て、後年密かに寂年月日のみを切銘した。

かかる厚意があるので、明応年間関東に後南朝の遺孳いづ(遺児)あるを知るや、内密に官の了解を得、密かに迎えて、人跡稀なる川中島の鶺鴒群がる地に住ましめた。即ち南朝の遺孳を注意人物としてかかる孤島に軟禁し、以て北系天子の子孫を安泰ならしめたのではあるまいか。開山塔に寂年月日を切銘したのもこの和尚か、その住職の素性と経歴を調べたい。

- ・因みに熊澤氏の本家争いの如きは、敢えて我等の関知すべきではない。

この最後の部分は、徳一郎は、寛道と照元の本家争い論争に加わるつもりはないと言っているのである。照元側が自前の月刊紙で寛道を糾弾したのに対し、寛道と長男の尊信は論文を発表して反論した。（『近代庶民生活誌』第 11 巻）

どうも、今回冒頭に掲げた石碑の建立が、本家争いの発端ではなかったか。

照元氏らが建てたのは、石碑（36年）・玉垣（49年）・参道標柱（57年）である。一方、寛道の兄の子政明氏らが建てたのは、五輪塔・灯籠・花立て（すべて40年）である。

また、静江氏を筆頭に伊勢湾台風後の八幡社の復興（昭和35年）にも彼らは寄附を寄せている。それを示す石碑は八幡社の境内に建っている。

（まだ木製の玉垣の熊野宮、昭和42年頃）

